

会報 あがた

松本県ヶ丘高等学校東京同窓会

発行人 樋口 和博
編集人 西塔 義睦
発行所 (〒101)
東京都千代田区練馬町73
不二ビル7階(株)相伝
TEL 03(253)6935
1部 100円(郵送料含)

「心のふれあい」の場に

会報「あがた」に寄せて

松本県ヶ丘高等学校東京同窓会

会長 樋口 和博



このたとを確信するものである。ふるさとは遠くにおいて思うものそして悲しくうたうもの

身者の中には、新聞、編集、出版、美術、その他、多彩な文化人が揃っているのに、今日に至るまで会報の発行を見るに至らなかったことは、私どもの大きな責任である。

ところが最近、これら若い文士、芸術家諸兄の総力の結果を得て、このさきやかな会報が発刊されることになり、これからも引きつづき刊行される見通しもつくようになった。

この会報により、母校の近況、恩師、先輩、同僚の消息や、各界における活躍を知ることができて、これが同窓生の強い結びつきの糧となるであろう。

松本平にもようやく春が訪れ、四月四日には高校入試競争率第一位の難関を突破し、青雲の志に燃える三百七十八名の新入生を迎えて、学校は新学期的活動を力強く開始しました。

今、高校は……

学校長 藤森 慎

県陵精神鼓吹の目的で、校歌「覇権の剣」などの応援歌の練習が四月九日から二十二日まで行なわれ、頬を紅潮させ、帽子を打ち振り、全身でリズムをとって声を限りに歌う、若々しい元気な歌声は、奮の稍を震して、校内に響き渡っております。

「県陵の意気ここに在り」

同窓会の在り方

松本県ヶ丘高等学校同窓会

会長 藤木 英一

このたび松本県ヶ丘高等学校東京同窓会が発刊されるに当たり、「同窓会の在り方」についてのご要望について述べた機会を与えていただき、名譽も一五、二〇〇余名(内旧制中

一面のついで

実、内容ともに充実した会であり、「県陵の意気ここに在り」と胸を張って堂々とその威風を誇るに足る会であると自負してはばかりません。

さて、本同窓会の主たる目的はなんとといっても母校在校生の育英事業であり、そのため文部大臣の監督下におかれ、社団法人として昭和二十六年事業開始以来、現在までに約一〇〇名の生徒の育英に努力を傾けて参りましたが、その他としては会員相互の親睦が主軸で、先輩後輩が機会ある毎に相会し、先輩は後輩の面倒を見、後輩は先輩の築いた業績、歴史を引き継ぎ、より香りの高いものに盛り上げ、さらには次の世代の方々のため団結力、推進力、実行力など総合的に涵養し、真実溢れる情熱をもって今後のよき指導者として

愚者の一念

根本 静夫

私が学んだのは昭和の初めの頃のこと、旧制松本二中と呼ばれていた。
そこで、「学んだ」などと言えば、大層聞こえはよいが、私は勉強嫌いで成績はいつも、五十人クラスの内四十八番か四十九番

目。だが柔道だけは大好きで文字通り無我夢中に熱中し、選手になって肩で風を切って歩いていた馬鹿者だった。今にして省みれば、当時は得意の柔道をもれみのにしていただけと思う。

例えば、英語ペーパー習字の木村先生。ある日、五枚の宿題を出されたことがあった。ひどく面倒臭いと感じた私はなかなかペンを執らず、やがて書き損なった用紙一枚は破り、もう一枚は書かず捨ててしまった。結局三枚を何喰わぬ顔で提出した。

私には、当時、富士製鉄の永野社長（現日商會頭）、八幡製鉄の稲山社長（現経団連会長）はじめ、多くの諸先輩の知己を得て、貴重なご鞭撻、ご指導を賜り、そのお蔭で昭和三十三年三月に東

て共存共栄の道を開きつつ同窓会の発展に寄与貢献されることを希ってやみません。
先輩同窓生の意気活躍振りが母校在校生の意気活動力に、蔭に陽に大きな影響を及ぼすことを私はここに敢えて力説したいと思えます。

その時の二人部屋の室長はいま県ヶ丘高校東京同窓会の会長をしておられる樋口氏であるが、寮生はそろって勉強家揃いで、その雰囲気にもなじみずまたも家に帰ってしまうという馬鹿な真似を繰り返していた。その馬鹿者がどうやら大学も卒業でき、いまは一國一城の主

鉄鋼の道を歩むことになった私、当時、富士製鉄の永野社長（現日商會頭）、八幡製鉄の稲山社長（現経団連会長）はじめ、多くの諸先輩の知己を得て、貴重なご鞭撻、ご指導を賜り、そのお蔭で昭和三十三年三月に東

どうか今後も先頭に立たれ、会の発展のためご尽力くださる役員の方々を始め、会員ご一同様のますますのご健康ご繁栄を心からお祈り申し上げ筆をおかせていただきます。

若かった日々を思い出すと、私の半生には中学校の先生方から賜ったご薫陶が、人格形成に大きな影響を与えたと痛感している。それは、黒板や教科書から教わったものではなく、先生方のお人柄から自らにじみ出て生徒の心に滲透する類いのものだった。

その後、よく、あの日のことを思い出す。そして五十年過ぎて、私の心にこびりついているのである。

幾度も列席させていただきましたが、あの東京一千万人の中の極く僅かな県陵卒業生がよくも強くまとまり、互いに親しみ合い、助け合って生き抜いている様を目のあたりに拝見し、ただただ感謝と感銘の念でいっぱいでした。

はにかみながらも、しゃちこ張った私は、その時の先生の言葉から「勉強の成績が悪くとも人間には、ひとそれぞれに取得があるものだ。誠心誠意、心から正直に尽せば、節度ある人生が送れるのではないか」と感じとったのである。

戦後久しく途絶えていた東京同窓会も、再開への同窓各位の強い要望と熱意により、総会開催に向けて、昭和43年10月17日第1回世話人会が開かれた。

その後、散り散りになっている同窓生の動向、住所の確認、名簿編纂の作業、さらに総会準備などに数次の会合を重ね、勤務が終ったあとの文字どおりのボランティアによる並々ならぬ努力の結果、同年11月25日、新宿厚生年金會館において、300余名の同窓生の参集を得て盛

以後、散り散りになっている同窓生の動向、住所の確認、名簿編纂の作業、さらに総会準備などに数次の会合を重ね、勤務が終ったあとの文字どおりのボランティアによる並々ならぬ努力の結果、同年11月25日、新宿厚生年金會館において、300余名の同窓生の参集を得て盛

以後、散り散りになっている同窓生の動向、住所の確認、名簿編纂の作業、さらに総会準備などに数次の会合を重ね、勤務が終ったあとの文字どおりのボランティアによる並々ならぬ努力の結果、同年11月25日、新宿厚生年金會館において、300余名の同窓生の参集を得て盛

東京同窓会 その「歩み」



- 第11回（46年3月5日） 東京タワー
 - 第12回（49年5月16日） 厚生年金會館（名簿発行）
 - 第13回（51年10月22日） 私学会館（名簿発行）
 - 第14回（54年6月8日） 新宿大飯店
- （以上、記録大月へ集）

ともあれ、愚か者の一念だがたとえ学生時代、勉強嫌いでも成績は悪くとも、なにかの時期に心気一転して、自分自身に対する真理を悟り、信念をもって絶えず努力を続ければ、必ずや、人生の展望は自然に拓けてくるものであると、私は信じてやまない。

こんな、たわごとがこれから

飛躍しようとしている同窓諸氏の共感を得られるならば、まことたたる次第である。

あの一年は

「青春のきらめき」だった

川上 嘉 則

全校一致のアルペン章
新しい学制下、新制高校がス
タートした昭和二十三年の春。
松本二中から横すべりで、高校生

恩師を語る 高島仁先生のこと

島崎 樹 夫

私が松本県ヶ丘高校に入学したのは、昭和二十九年の春である。木曾の西のはずれから松本の高校に行く気になったのは、画家志望であったことに起因する。当時中学の図画教師が縣陵の出身で、教えを受けた高島仁先生の素晴らしい筆を私に吹込んだからに他ならない。



術家の姿が、そこにはあった。

初めてお目に掛かった高島先生は、チャップリンなる仇名を奉られた所以のチョビ髭を鼻下に蓄え、無造作に白髪まじりの長髪をかき上げながら、独特の暖れ声で話された。細めるところをけしてしまいそうな柔和な眼、地味ながら着実に年輪を重ねて来た実直な芸

亦、先生は人情家であり、無類の酒好きでもあった。飾り気のない温厚な人柄は多くの人達から慕われ、むしろ高校を卒業してから、増々交わりを深めて行かれるような存在であった。美術部の同窓生が集って、先生を中心に松本

で展覧会を開いたり酒宴を催したりしたのも、偏に先生の人徳であろう。

後年、先生の所属していた一水会展の折、私を上野の美術館に呼出して昼飯やビールを御馳走して下さい、どうだや島崎やい、絵は描いてるかや」と励まして戴いたことも再々である。

東京在住の美術部仲間が、先生の東京での初めての個展を、日本橋の画廊で企画したのは昭和四十九年の秋である。自選の作品を揃えられ、数日後に会期を控えて急逝されてしまった。非常に喜んで楽しみにして居られたのに残念である。急遽、遺作展となったのであるが、仆れる間際まで絵筆を取られた先生の教えは、今も私の心の内に脈々と生きている。

東京国分寺市在住 画家

となつた私たちの第一の課題は新しい校名と校章の制定だった。俺たちが新しい歴史を創るんだーという若者たちの気負った息吹きが学園を大きく包んでいった。生徒会の総会では、何の迷いもなかった。全校のすべてが大好きなアルペン章だったから、すつきりした近代的なデザイン、格調の高さ。松本二中以来、永年にわたって先輩から語り伝えられてきた「アルペン章は日本一」という誇りが私たちを支配していた。校章の中学の「中」を高校の「高」にかえる作業だけ。このデザインは図工担当の望月先生（ニックネームはスパイ）の手によって完成した。県ヶ丘という校名と共に決定したタイミングは、おそらく県下でもトップをきるスピーディなものであったと思う。

た楽しい日々でした。ユニークな教師も多かった。三六五日、ピアノを弾きつづけていた若い音楽教師、千野先生（通称オンチ）、口からアワをとばして語つてくれたジャンバルジャンの物語は、英語の桐山先生（快男児）。生物教師の深沢先生とは夜を徹して研究の情熱をわかち合った。

文化祭荒しの県陵生という畏名を他校生につけられた秋。優勝候補の松商を撃破した夏の球場の歡喜の涙、校技のサッカーも、水泳もバレーも、次々と開校以来の好成績にわきにわいた一年だった。英語の弁論大会で優勝した一年生の小西昭之君（現毎日新聞編集局次長）をはじめ、下級生にも俊秀の士が揃っていた。

あの生徒門の眼前にひろがる雄大なアルプスの峰、白樺の林、弱音をばくなく、と教えてくれた小松先生の碑。多感な少年の胸にそれらは忘れ得ない鮮烈な青春のドラマだったと思う。

戦乱の渦から平和の春へ——新制高校誕生の六年間は、私たちの生涯の短くも美しく燃えた日々であった、といつてよい。

（第一回卒業、興風会会長。現在は株式会社ブレイン代表取締役社長）

燃えに燃えた悔なき青春

戦後で教科書もなく、食糧難時代ではありましたが、充実し



広場



このページは同窓生のための情報を主として、大いに活用してください。

天ぶら・うなぎの

新宿「湖浜」

新宿区西新宿7の4の5
電話 〇三三六三二九六
(371)三六九六

夏がやってきた。ビールや酒がおいしくなる季節である。そこで思うのが、どこかに安くて、うまくて、安心して飲めるお店はないか—と虫のいい話になる。ここに、この希望がかなう店がある。紹介しよう。

新宿は広小路—通称・大久保



通りに面し、商工中金とオークラ屋ビルの前に、うなぎ、天ぶら、ふぐ、和食を主として、味の「新宿」と銘打った「湖浜」がある。

田舎作りの静かな落ち着いた店内は、六、七人が座れるカウンターと、二十五人ほど収容できる座敷とがある。

主人の宮坂尚宏さんは、高校六回の卒業で、人柄も見るから濃厚そのもの。「自分のうちが松本の上土で川魚専門の店をやっていますから……」ここに

開店したのは、昭和三十八年です。それから、もう、かれこれ十八年になります。と、店をはじめた動機などを、言葉少なに語ってくれた。

店のメインは、天ぶらとうなぎ。天ぶら類では、定食が七八〇円から一三〇〇円、海老天重が一〇〇〇円から一六〇〇円、いか(もんご)天重が七五〇円、天重が六〇〇円から八五〇円。

うなぎは、うなぎが一〇〇〇円から一六〇〇円。また、おつまみとしてよく出るのが、柳川なべ七〇〇円、生野菜四五〇円で、茶そばも人気がある。冬はふぐ料理が出るそうだ。

午前十一時から午後二時まで「ランチタイム」で日替り定食五〇〇円が人気。夜は五時から十一時まで営業しているが、ユニークなのは五時から八時まで

だが「晩酌タイム」と銘打ち、大徳利一本とおつまみ三品で九八〇円。ただし「県陵の卒業生は、この値段でオールタイムOK」とのこと。

なお宴会の申込みは半月前に。歳末と新年はなるべく早く予約してほしいとのこと。 (西)

田舎料理がおいしい

小料理「雅」

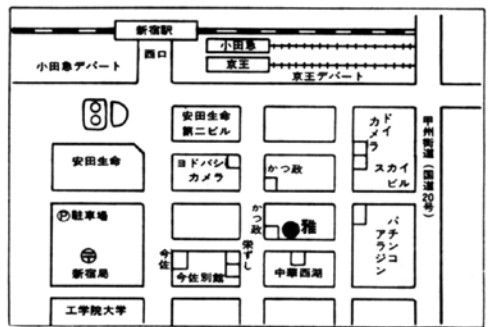
新宿区西新宿1の15の10
電話 〇三三六六六七七
更科ビル三階

もう一軒、新宿にある店を紹介しよう。卒業生ではないが、わが県陵卒業生がよく利用するというので、敢えて紹介することにした。

「県陵の卒業生がよくお見えになりますね」—小料理「雅」のママさんこと・杉山雅子さんはいう。

新宿駅西口、ヨドバシカメラの近く、更科ビル三階にあるこの店は、小さいながらも落ち着いた雰囲気があり、店内は活気がある。

十人ほどのカウンターと、十五、六人が座られる座敷とがある。ママさんは松本蟻ヶ崎高校の卒業生で、気さくな和服のよく似合う日本の美人である。「県陵の方々はとても人柄がよく、豪放らしい落るところが好



きですネ」と。聞くところによると、昔の恋人は県陵生とのことである。

料理は田舎料理がおいしい。なかでも納豆揚げ五〇〇円、イモの煮ころがし五〇〇円、野沢菜油いため三〇〇円があり、馬さし(ひれ生)一六〇〇円からはこの店の目玉。夏はスタミナ料理として、なすはさみ揚げ五〇〇円、牛たん焼き九〇〇円、柳川なべ八〇〇円、イカの丸焼き八〇〇円。その他、ザザムシイナゴ、サナギなどもある。

そして、お酒は安曇野の酒「酔園」と「大信州」。それにサントリ—関係である。ちなみに営業時間は、午前十一時から午後二時(昼食)と夜は五時から夜中十二時までとなっている。

編集後記



東京から電車で一時間も乗れば水田を見ることが出来、信州も今ごろ田植だらうかと思つて眺めていると、しばし故郷に帰つた気分になります。

先輩諸兄のお力添えで、ようやく一号が出来上がりました。何でも最初は夢中でやりましたが、うのですが、継続するのはさらに困難であろうと思います。

一号に原稿をお寄せの方々は予定以上の長文をいただき、ありがたいことでした。そのため、写真をあえて少なくし、広告も省きました。

二号三号には恩師の思い出などを年代順に掲載したいと考えていますので、思い出話を短文でお寄せ下さい。企画やご意見もお待ちしております。

編集からのお願い

松本県ヶ丘高校東京同窓会では、来年度に名簿を作成する計画がございます。そのため資料として同窓生の消息をお待ちしております。本人でなくともご存知の方は、会報発行所までご連絡下さい。また「会報あがた」についてご意見や「希望企画」などございましたら、ハガキか封書にて編集室(向渋谷区笹塚一五四一九—二〇三 降旗勝次宛)までお送り下さい。